
班決めなんて不毛でしょ？

神崎ミキ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

班決めなんて不毛でしょ？

【Nコード】

N6525R

【作者名】

神崎ミキ

【あらすじ】

班決め……それは、どこでも起き得る出来事。生きている限り誰しも一度は経験する事。

それは例外なく僕にも訪れた。

クラスで孤立してしまっている、この僕にもだ。

誰か教えて下さい。

班決めにどんな意味が有るんですか？

高校生となり、もう三週間が経過してしまつたらしく、クラスはある程度落ち着いた様子だつた。友人を作る者、グループを組む者、一人で居る者、それぞれのポジションが半ば確定的になりつつある中、学校側は何を考えてるのか仕掛けてきた。

まあ、意図事態は割と分かり易いのだけど。僕が言いたい事は、つまり『こんなの無駄じゃない？』って感じである。

「ねえ、遠足つて何しに行くんだろ？」

「さあ、私達みたいに孤立している者をいじめたいのかもね」

「そんな卑屈な……」

そうなんだよねえ。僕も鷺津さんも、所謂高校デビューに乗り遅れ、絶賛孤立中だつたりする。

クラスに仲が良いどころか、話した人すら居ないと言う、この残念さ。鷺津さんが居なければ、今頃僕は『ぼっち』状態になって、一人空しく外を見ていただろう。おそらく鷺津さんも同じ。

そんな僕達を攻める様に、現れた定番イベント『遠足』。

「今まで見て見ぬ振りをしてたけど、さすがに前日となると無視はできないね。ていうか、いつの間に班決まったの？」

「一週間前に担任が言い放つた『自分達で決めて良いよ』という、一見良心的に見える見事なまでの責任の丸投げによつてだよ」

「ああ、そついや言つてたね」

孤立している人達にとって、自分達で班を決める事は至難の技だ。中学の英語の授業でペアを作りなさいと言われたのに、ペアが作れなかった挙げ句、先生がその事実にあきまらず、呆然と時が過ぎるのを待った僕の気持ちを先生には理解できまい。もし出来たのなら先生が班を決めてくれた筈だ。

「遠足の目的が親睦を深める事なら、僕達みたいに輪に入れない人を気遣うべきだと思うんだけど」

「まあ、私には輪に入る必要性が見いだせないのだけどね」

「でも、せつかくの一生に一度の高校生活なんだし、楽しまなきゃ損だよ。思い出に残る位に」

「余り者の集まりでかい？」

「うん、まあ……一応」

孤立組の定めとも言える、『残った人達で一班ね』である。遠足の班は四人班、このクラスは全三十一人。つまり余り者は三人。

そして、その三枠中二枠は僕らで決定間違いなし。疑う余地がない。

「じゃあ、真に残った一人は一体――」

「現実逃避は見苦しいと思うよ」

「うつ……」

分かってるよ。このクラスで僕達以上に孤立している、それどころか学校からすら浮いている人物と言ったら、赤い髪の不良、火野大地しかない。

「多分と言うか間違いなく、あいつとだけは一緒になりたくないって思いで班決めが一瞬で終わったからね」

「ああ、通って班決めの際の記憶が希薄なわけだ」

参加してない上に一瞬とかね、しょうがないよね。

「もういつそ、休もうかな」

「おや、参加しないのは損だったのではないのかい？」

「参加して得られる物に、僕は見当がつかない」

遠足って確か、河原にバーベキューだぞ。それを漫画とかでしか見ないような赤い髪の不良と行って何になると言うんだ。『何かもう燃えてるぞ』。あ、頭かぁ』とかやればいいのか？

「ねえねえ、鷺津さんも同じ立場なんだから何か意見を言つてよ。

休むつてのは無しだよ」

「はあ……やれやれだね」

「え、なに？」

「あいつが遠足に来ると思ってるのかい？」

「……………あ、そりゃそうか」

授業ですらサボってるし、わざわざ面倒な遠足に来るはずないよな。冷静に考えたら。

「あれ、てことは……班って僕達二人？」

「通常なら他の班に振り分けられるのだろうけどね。通常なら」

火野が実際に休むかどうかは当日にならないと分からない。だから僕達の班の行方も当日まで未定の状態になる。いざ遠足って時に、はたしてクラスから孤立している僕達を受け入れてくれる班は有るのか否か。

僕の経験から来る予測では、華麗なスルーに一票。河原の角でひっそり肉を焼いている姿が目につく。

「……それはそれで有りじゃないかな」

かなり寂しい高校生活だとは思うけど。

「まあ、私は読書でもしてるから、なんにせよ関係ないのだけれどね」

「……ねえ、さすがにアウトドアなイベントにインドアな趣味を持ち込むのは止めない？」

「私の勝手だと思うのだが。それに前もって準備しておかないと……」

……当日暇になるよ、きっと」「ははは……」

笑えない。

笑おうと一応の努力はしてみたけど、それは酷く乾いたものだった。鷺津さんの言う通り、冗談ではなくかなりの高確率で僕は明日、河原で暇を持て余している。側には読書をする鷺津さん、遠くには楽しそうにバーベキューをするクラスメート、そして川の流れをぼんやり眺めている僕。

もし神様が居るのなら、どうか教えて欲しい。青春って……なんですか？

「詰まるところ、私達にしたら明日は単なる授業の無い日ってわけだ」

「バーベキュー食べて、河辺でのんびりか。面倒臭いな」

どうせ授業が無いのなら、家でゆっくりしてたかった。無駄に時間

を過ごすのは、ただそれだけで疲れる。

……こんな考えだから青春は僕達を避けるんだろっな。青春する気ゼロだし。

「……ねえ、鷺津さん」

「……なに？」

「これは鷺津さん仕込みのドッキリか何かなの？」

遠足に行く当日、僕を含む一年生全員はいつもより少し早めの時間に学校に登校し集合していた。そう全員。一人の欠席も無く。

「まさかでしょ、私にとっても想定外の範囲外の事態だよ、これは」
鞆一杯に本を積めて来てるもんな。のんびり読書をする気満々だったのが良く伝わってくる。

だからだろうが、普段はポーカーフェイスな鷺津さんが一瞬動揺したような顔を見せた。今も顔こそいつも通りに戻っているが、声の抑揚が普段と違う。

それだけ予想外の事態だったのか、火野の参加は。

まあ、僕も驚いたけど。だって、学校に来たら赤髪が一年生の群に混じってたんだ。僕の無駄で平和な一時が大崩壊。なんてこったな
今日この頃。

「やっぱり休むべきだったんじゃないかな」

「こればかりは同感かもね。ちょっとあいつを見誤っていたみたいだ」

火野はしょっちゅう授業をサボっている。学校自体に登校してこない時すらある。

人柄もあり、いや、かなり評判良くない。

愛想が悪いのに始まり、上級生と喧嘩をやらかしたりと問題点は色々有るけど、決定的に印象を悪化させているのは、あの真っ赤な髪だろう。その血を浴びたよう赤に、誰もが不気味がる。

僕や鷺津さんみたいな孤立と言うより、一匹狼という言葉の方がしっくりする。

そんな他を寄せ付けず、自身も他に寄りつかないように振る舞ってきた赤い狼が……何故？

何故、わざわざ遠足の日に現れたんだ？

「もしかして遠足の事を知らずに登校してきたとかかも」

「……だったら良いのだけどね」

その後、難なく事態は進行して行き、クラスごとにバスに乗り込んだ。期待ではなく不安を目一杯抱えたまま。

バスに乗ってもはしゃぐ者は誰一人居ない。皆静かだ。

それはおそらく、高校生にもなつて遠足にはしゃぐのは格好悪いなんて理由じゃなく、僕の後には隣の席を空けて座る火野のせいだろう。クラス全員に恐れられている赤い狼、誰もがその機嫌を損ねまいと沈黙を保っている。先生すら此方を見ない。関わらぬが吉と思ったのだろう。

「これはこれは、随分と思い出に残る遠足に成りそうだね」

「……そうだね」

確かに今まで良い意味でも悪い意味でも騒ぎに縁が無かった僕からしたら、記憶には刷り込まれるだろうな。

それが良い思い出か悪い思い出かは分からないけど。いや、大方予想がつくけど敢えて考えない事にする。既に地に着いているテンションをさらに下げたくない。地面を掘るのは御免だ。

唯でさえ、今の鷺津さんの一言でバスの中が重くなるのを肌に感じたと言っのに。

目的地に着くまで、ずっとこの状態とかきつ過ぎる。

……と言うわけで、そんなこんなも無い、ただただ沈黙だった二時間が経過し、目的地に到着した。

体感時間ではもっと長かった気がする。重い空気の中二時間は拷問だぞ。しかも僕の場合は後に元凶がスタンバイしてるオマケ付き。

「気分を入れ替えるためにも、さっさとご飯を食べよう。所謂やけ食い」

「微妙に意味が違うと思うのだが」

「気にしない気にしない」

「あと食べるのはまだだよ」

「……え、何で？」

「私達は何しにここに来たんだい？」

「何しにつて、バーベキューだろ」

「バーベキュー前に遠足だよ。歩かなきゃいけないのさ」

「……マジ？」

「ああ、聞いた話じゃ三十分程かかるらしい」

「そんなにかかるなら、もういつそバスで行こうよ」

「そしたら遠足でなくなってしまうからだろ」

「……なんて無駄な遠足なんだ」

「しかし、キミがそんなにバーベキューを楽しみにしていたとは意外だ」

「別に楽しみにしてたわけじゃないよ、たださっさと食べたかっただけ」

「それでも、班三人でやるバーベキューが待ち遠しいのдар？」

「………あ」

忘れてた。

何故遠足に来たくないと思っていたのか、その理由を。バーベキューは班で行う。

普通は四人で一班のだが、人数が足りないため僕達は三人だった。僕と鷺津さんと……火野による。

「もう帰ろっか？」

歩く気力が湧いてこない。むしろ現象している。

「それを実行するには二時間ばかり遅かったね」

「……だよ」

バスに乗る前に気づいてたら、その選択肢も有ったんだろうけど。火野の奴、集合の時に姿を消したから安心して席についたと言うのに、時間ぎりぎりにバスに乗り込んできて、気がついたら後に居た。心臓に悪いから、思わせぶりは止めて欲しい。

おかげで僕には何の抵抗も出来ず、バスはクラス全員を乗せ出発してしまった。

まさかこれは、計算しつくされた罠だったりするのではないかと疑いたくなる。

「あいつが乗ってきた時点でバスを降りれば良かったじゃないか」

「僕にはそんな目立つ事は出来ないって」

それに、そんな事をする勇氣も度胸も、そもそも発想すら無いって。

「まあ何はともあれ歩くとしようか」

「それもそうだね」もたもたしていると置いてきぼりを食らってしまふ。そうなる道が分からない僕達は迷う可能性がある。下手したら河原にたどり着けないかも知れない。

もしそうなった場合、皆はどのタイミングでクラスメートの欠落に気づくのだろう。僕の予想では、点呼を取るまで誰も違和感を持たないだろうと見ている。

だってクラスメートが僕の名前を覚えているのかさえ疑わしいからな。交流、一切無し。

一度はぐれると輪に入るタイミングが掴めない。ただでさえ積極性がないから僕。危うく高峰の言った通り『独り』に成りかねなかったし。

前はそれでも良いかなと思ってたけど、鷺津さんと出会って人との関わりは大事なんだと思いつた。

「……なんなんだい、人の顔を見てニヤニヤと」

「いや、別に」

ただ、出会えて良かったと思っただけだ。
せつかくの高校生活、楽しまなきゃ損だ。そして、独りでは楽しやしめない。

僕は視線を鷺津さんから移し、前を歩く人の後ろ姿を見る。赤い髪をした孤独な狼を。

「ほい、三人分の材料だ」

「ありがとうございます」

河原に無事到着し、点呼も取り終えたと、各自バラバラとなりバーベキューに取りかかる事になった。

一応役割分担では、僕が材料を貰い、鷺津さんが網とかを用意、火野が木とか燃やす物を探すとなってるんだけど……大丈夫かな？

二人が協力して準備してる姿が全く見えてこないけど。

火野は見ての通りあんなだし、鷺津さんは鷺津さんで火野を嫌ってるし。

そして何よりも、二人ともアウトドアのイメージがない。

「ところでだが、八雲の班は他に誰がいるんだ？」

僕が最後だったのか、材料を渡し終えて暇になった佐野先生が話しかけてきた。「えっと、鷺津さんに火野です」

「がっはは、それは面白そうな組み合わせだな」

「……そうですか？」

僕には面倒な事になりそうな気がしてならないんですがね。

佐野先生は、僕や鷺津さん、更には火野の事もよく見ていて、良く理解してくれてると思う。

……隣のクラスの担任なのに。

それに比べてうちの担任は……

一度も会話をした記憶が無いぞ。

佐野先生が担任な高峰がうらやましい。

「まあ、難しいことは考えず、楽しめ、それが第一だ！」

「……はい」

楽しめるに越した事は無いと思うけど……はたしてどうなることやら。

まあ、取りあえずは、鷺津さん達の場所に戻るか。

材料が無いとバーベキューが始まらないし。

僕は佐野先生に別れの挨拶をして去る。

「……で、これはどういう事？」

「見ての通りだと思うけど」

「うん、ごめん。これは予想外だった」

僕は現場にたどり着くと驚愕した。

「なんで燃えてんのっ！」

焼くのために火が必要なのは分かる。分かるけどさ。

目の前の惨事を見て『さあて、そろそろ肉を焼こうかな』なんて言えない。

轟々と燃える様は、もやキャンプファイヤーの領域に達している。

これでどうバーベキューをしろと。何を焼けど。

「——で、ぼんやり眺めてないで火を消さないと！」

「えー、せっかく火がついたんだから利用するべきだと思うんだよ」

「どうやって!？」

「火の中に直接突っ込んだら良いんじゃないか？」

「いやいや、それは無理が——で、何で高峰が居るんだよ！」

「何か流れて」

どんな流れが有ったんだと是非突っ込みたい。

だが今は無駄な時間を使うべきではないと、さりげなく座る友人を無視して事を進めることにする。

「取りあえず水を組んでこよう」

「あ、ボク無理だよ。松葉杖だし」

「高峰には言つてない」

「私には水を運ぶなんて重労働は無理なのだよ」

「……じゃあ」

やむを得ないと、普段なら声をかけようとも思わない火野に――

「あれ、火野は！？」「あいつならさつき消えたよ」

「くっ……しょうがない、自分で行ってくるっ！」

そうして僕は、もしもの時のために用意されていたバケツを掴み、川の方に向かう。

僕達の拠点は川から若干遠い。なので松葉杖の高峰はもとより、腕の細い鷺津さが断るのは仕方の無い事だった。

そして、他のグループからかなり離れてしまっているため、誰もキャンプファイヤーに気づかないのも仕方の無い事だった。そもそも何でそんな場所にしたんだって話だ。

「お、有った有った……ん？」

川を見つけて安堵した僕の視界には、もう一つ別のモノが映った。

「……火野」

小さく呟く、その目の前に立っている、手に水が一杯に入ったバケツを持った赤髪の男を。

ああ、だから二人は何もしようとしなかったのか。その必要が無かったから。

「僕も必要なかったかな」

そんな感じでやるべき事を失い、足を止める。

やがて、火野とすれ違い

「おい」

声を発した。おそらく僕に。

「……………え？」

その声に僕は、ただただ間抜けな反応をするだけだった。

だって、相手はあの火野だぞ。一匹狼で不良の、そう不良を気取っているあの火野なんだぞ。

この反応も仕方の無い事だ。

まあ、普通だったら怖がって、酷ければ逃げ出すところなんだろうけど。例外なのは、僕以外だと鷺津さんと高峰と佐野先生位だと思

う。

皆が火野を避ける理由は僕と違って『恐怖』なのだから、やはりこれでも仕方の無い事なのだろう

「……聞いているのか？」

何も言い換えさえないせいで、痺れをきらしたのか火野が再び声を発した。

正直な話、火野は苦手なので関わり合いには成りたくなかった。

でも、まあ、向こうから話しかけてきたんだ、そんな事を言ってる意味はないか。

俺は学校には一応通う事になっている。通わなければ高校を卒業出来ないんだ、だから出席数を稼ぐ為に、ある程度授業にも出る。

そんな訳で、いつも通り登校したある日だった。

大勢が校門の前に集まっているのが見えた。しかも一年。

なんでも遠足なんだとか。初耳だ。

だから周りから感じる『お前は読んでないオーラ』を無視して、いつも通り教室に向かう。おそらく開いてないだろうが、ここに居る気はしなかった。

遠足に行く気も必要もない。俺はあくまで卒業出来ればそれで良い。だと言うのに――

「おいおい、今日は授業やらねえぞ、がっははは」

佐野に見つかり、絡まれる。鬱陶しいし面倒臭い。

「良いんだよ、遠足なんて行くつもりないんだから」

「だったら何で学校に来た、まさか間違えたのか？」

無視だ無視。

ニヤつく佐野を放って、再び教室に向かう。

「なあ、火野。お前は何しに学校来てんだ？」

だから佐野の言葉に応える必要は無い。

「勉強するでもなく、部活をするでもなく、友人を作るでもなく」
無視だ。

俺は卒業出来ればそれで良いんだ。

それ以外は望んでいないんだ。

「昔誰かがこんな事を言った、『たった一度きりの高校生活なんだ、
楽しまなきゃ損じゃないか』とな」

そんな事は知った事じゃない。

俺には人生を楽しむ必要は無いし、権利も無い。

……なのに、何を考えてか、気がついたらバスの中。

依然『お前は読んでないオーラ』を、更には『なんで居るんだよオ
ーラ』まで感じる。

自分だけ場違いなのが、嫌と言う程良く分かった。

今からでも遅くない。そう思い立ち上がろうとするが

「これはこれは、ずいぶんと楽しそうな遠足に成りそうだね」

「……そうだね」

前の席でそんなやり取りをされ、俺は立つタイミングを失い、バス
はそのまま出発してしまった。

バスが止まった後、しばらく歩き、バーベキューの準備をする。

班は知らぬ間に決まっていた。バスの前に座っていた二人組。名前は
火野と八雲。

おまけに、役割分担も驚津に勝手に決められ、俺は燃やす物を探す
係りとなった。燃やす物なんて、薪と新聞紙、固形燃料が有るんだ
から、もう要らないだろ。

そう思いつつ、俺は八雲が消えた後に、同じく場を離れた。

もちろん燃やす物を探す為ではない。

バーベキューなど俺抜きで勝手にしてくれば良い。向こうもその
つもりで、こんな無意味な係りを押し付けたのかもしれない。

俺は居るだけで空気を悪くするから。

「やつぱり来るんじゃないかった」

そう誰にでも呟くと

「なんで？」

足下で何故か仰向けになっっている男が疑問顔を浮かべていた。

「あ、分かった！ あんた燃やす物が見つからないんだな！」

「……………はあ？」

「それなら木の枝分けてやるよ、そこに有るだろ」

男が指す方には、山のように木の枝が有った。木の枝だけではないが。

「……………松葉杖？」

「そ、あれボクの。どうしようか迷ってる時にあんたを見かけてさ。声をかけるタイミングを見計らってたんだよ」

……………馬鹿なのか、こいつは。松葉杖で手が塞がってるにも関わらずあんな量の無意味な木の枝を。それに――

「お前は俺が怖くないのか？」

俺に何故声をかけたんだ？

別に窮地って訳でもあるまいし。

「怖いって……………何が？」

そんな俺の疑問に本気で疑問を返してきた男を見て、思わず溜め息が漏れた。

同級生はおるか二年や三年、先生でさえ俺にはまともに接する事はない。同級生なんて目も合わせようとしない。

それを俺は不満に思った事は無い。そもそも狙ってしている事なのだから。。

「あ、松葉杖取ってる？」

だと言っのに、こいつは……………

「たくっ……………！」

なんで俺がと思いつつ、松葉杖を渡し、何故か木の枝を持つ俺。

……………こいつは何か苦手だ。やりづらい。

どうにか別れようと、班に戻ると言つと

「あ、ボクついてくわ」

とRPGに出てくる仲間の様に後ろについてくる。

どうしたものかと思ひながら足を進めていると、見覚えのあるところにたどり着いてしまった。

「おや、意外だな。戻ってくるだけではなく、ノルマまで達成してくるとは」

そこに居たのは、薪を組み、火を付けようとしていた鷺津だった。

「戻るつもりなんて無かった。こいつのせいだ」

両手が塞がっているので、顔で松葉杖の男を指す。

「ふむふむ、なるほどな」

鷺津は男の顔を見て、何かを納得したようだった。

「お、鷺津さんの班の人だったんだ。てことは八雲もか!」「ちょっと良い、手伝ってくれ。やり方がよく分からない」

「お、任せて。ボクもやり方知らないけど」

この男、鷺津や八雲と知り合いだったのか。そしてやっぱり馬鹿だったのか。

「あ、そうだ。あんたも手伝いなよ」

「なんで俺が……」

「なんでって、あんたの班でもあるだろ?」

「……分かったよ、やれば良いんだろ」

本当に苦手だ、こいつ。調子が狂ってしょうがない。

「取りあえず燃える物を一カ所に集めよう」

薪、木の枝、新聞紙が集められる。

「並べなければ意味が無いだろう」

燃える物達が並べられ、組み立てられていく。そして火を付ける。

「あれ、うまくいかないな」

何度かそれを繰り返すので

「これを忘れてんだろ」

置き忘れられた様に有った固形燃料を掴んで投げた。

「おお、そうか！」

で、なんとか火がついた。

「しかし遠足に参加するだけでなく、バーベキューの準備まで率先してやってくれるとはね」

率先なんてした覚えは無い。……が、それよりもだ。

「なんでお前も怖がらないんだ？ お前も馬鹿なのか？」

「ふん、少なくとも貴様よりは馬鹿ではないな」

「な……っ！」

「全ての者が貴様を恐れると思っていたら大間違いだ。その松葉杖も微塵も恐れはしなかっただろう？」

「……だから、なんでなんだよ！？」

「そんなもの簡単だ。お前が愚かだからだ」

「な、なんだと……」

「熱くなるのは構わないが、程度が過ぎるとやけどするぞ」

「さっきから何を言ってるやが——」

「ちょ、ちょ、火！」

鷲津に叫びきる前に、松葉杖が突然わめきだした。

一体なんだって言うんだ、今はお前に構ってる暇は……って
「熱っ！」

後を振り向くと、さっき熾した火が無駄に燃え盛っていた。やはり固形燃料十個は要らなかったか。で、今はそんな事より消化だ。

俺は転がっていたバケツを掴み、川に向かう。

なんでこんな面倒な事になったんだ。

佐野に遭ってしまったせいかな？

松葉杖に遭ったせいかな？

それとも鷲津かな？

全く……どいつもこいつも平然と喋りやがって、挙げ句俺が愚かだと！

俺は……俺は……！

そうやって誰も答えぬ問を延々と繰り返す。

水を汲み、帰る最中にも。

その途中で、誰かが近づいて来るのに気づいた。八雲だった。

そして俺は今まで、少なくともここ五年はして来なかった行為をした。

「おい」

自ら人へ声をかけた。

あの日、もう誰も巻き込まないよう、他人に関わる事止めて以来しなかった、その行為を。

「お前は……俺が恐いか？」

「いや」

僕は首を左右に軽く振り

「全然」

火野の問いかけを、ばつさりと否定する。

僕は火野が苦手だ。だけど恐くはない。悪意の無い者に恐れを抱く事はしない。

「……なぜだ！？ お前も俺が愚かだと言うのか！」

「そんな事はないよ。だって、君がしているのって精々サボり位でしょ？」

「……………は？」

「喧嘩だって相手から売ってきたらしいし。君を恐れる要因が見つからない」

「おいおい、待てよ……」

僕が人見知りなのは初対面の相手だけだ。何故なら初対面だと、相手の事を全く知らないからだ。

相手の事を知らないとう接すれば良いのかわからない。

悪意のある者には、出来るだけ関わらず、面倒事や厄介事になる事は避けてきた。

そんな生き方をしてきたからこそ分かる、目の前の男は悪意を持っていないと。ただ不良の真似事をして、他を自分に近づけないようにしているだけなのだ。そんな男に関わる事は、面倒事や厄介事以外の何事でもない。だから僕は火野大地が苦手なのだ。だから避けてきたのだ。下手をして狼に噛まれぬよう。

それが向こうから近づいてきた。

一匹だった狼が自ら群に。例えば相手が群の端にいる僕だとしても、それを見過ごす事は出来なかった。

「俺は……恐がれる存在で良いんだ。それで誰も俺に近づかなければ、それで良いんだ。だから……」

ハリネズミのジレンマという言葉がある。とげを持つハリネズミは自分が傷つかないよう、他を傷つけないよう、程よい距離を見つけなくてはいけない。

火野場合はその距離を見つけるのを諦めたのだろう。誰かを傷つけるくらいなら近づきも近づかせもしないと。

その結果独りで生きる赤い狼と成ったのだろう。

今から三週間前、鷺津さんは空気と成り人と関わろうとせず独りになった。

昔、僕は臆病で目立たないように振る舞内に独りになった。

火野は他を威嚇し遠ざけて自ら独りになった。

理由も手段もまるで違うが、帰結する所は一緒だった。自分の周りには誰も居ない。独り。

でも、あいにくだけど僕はもう違う。

孤立はしていても、決して独りではない。

側には鷺津さんがいる。……探せば高峰もいる。

昔の僕は独りだった。友達も無く、面倒事、厄介事を避け、ただな

なんとなく周りに合わせて生きて、気づけば心を許せる相手なんていなかった。

そんな生き方をした僕だけど、それは、一人が良いのではなく、一人でも構わない、そう強がっていたただけだ。それはとても寂しく虚しいものだった。今ではそう思うようになった。

独りだった時の僕は平和ではあったが、幸せではなかった。正直思いついたなん数えるまでもない。数えることも出来ない。

だから、過去に何が有ったか僕は知らない、生き方を変えるなんて無責任な事は言わない。

だからさ。

「まずは今は火を消しに行こう」

「……………は？ いや、だから俺はだな」

火野が何かを言っている。

「僕や鷺津さんなら気にする事はないよ。ハリに刺さるなんて間抜けな事態にはならないから」

だからさ、まずはキャンプファイヤーを消しに行こう。そしてバーベキューして、食べて、思い出作ろうじゃないか。

例え、それが寄せ集めの班でも、楽しまなきゃ、やっぱり損だ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6525r/>

班決めなんて不毛でしょ？

2011年10月6日10時44分発行